

会派視察・研修報告書

会派名 オールたじみ

代表者名 石田浩司

1 日 に ち	令和 7 年 8 月 5 日 (火)
2 視 察 先	愛媛県今治市
3 参 加 者	石田浩司 奥村孝宏 成田康弘 黒川昭治
4 調査・研修のテーマ	今治クリーンセンターについて
5 主な内容	今治市クリーンセンター見学・建設の経緯など
6 所感、提言事項、課題等	【議員氏名】石田浩司 本施設は、環境負荷低減と安定稼働を重視し、最新のストーカ炉式焼却設備を導入している。 焼却方式は審議会で複数案を比較検討し、「温暖化負荷の低減」「信頼性・安定稼働」「運転管理の容易さ」「資源循環性」「安全性」の観点で総合的に優位と判断された。他方式は外部エネルギー（コークスなど）依存や安全性で劣るとされた。 建設地は候補 6 か所を検討し、第 1 候補地は 2 年間協議が進まず断念。最終的に旧クリーンセンター隣接地を選定し、建設前に 10 回、建設中に 4 回の説明会を開催し住民理解を得た。 建設費は約 128 億円（国庫補助 38 億円、合併特例債 85 億円、一般財源 5 億円）で、排熱は 3,800kW の発電に利用。発電量の約 3 分の 1 を施設内で使用し、残りは売電。場外余熱供給は行っていない。 運営は DBO 方式（設計・施工・運営一括委託）を採用し、総合評価一般競争入札で(株)タクマ代表のグループが落札。特別目的会社「今治ハイトラスト」が 20 年間、約 100 億円で運営する。 減量・資源化対策として、年間約 5,000t 発生する焼却灰・飛灰のうち焼却灰 3,000t をセメント原料として再利用。 環境対策として 850℃以上で焼却しダイオキシン類発生を抑制。活性炭・消石灰による有害物質除去、ろ過式集じん器によるばいじん除去を実施。 騒音対策は屋外作業ヤードを設けず騒音源に消音材を使用、臭気対策はプラットホーム出入口にエアカーテン設置。さらに住宅地を避けた搬入経路の確保、接続道路拡幅、敷地内車両待機スペース整備など交通対策も徹底している。 焼却場建設に向け候補地の市民説明会は大変重要であり、ストーカ炉を採用した場合、残った焼却灰の処理や下水道汚泥処理（今治市は業者委託）も同時に検討する必要があると感じた。

【議員氏名】 奥村孝宏

本市が「ごみ処分場の広域化」を進める中、平成 30 年にバリクリーンと称して運営を開始した「今治市クリーンセンター」に伺った。

1 炉について

今治市はストーカ炉を採用。その理由は審議会で「焼却方式（ストーカ式）」、「焼却＋灰溶融方式（ストーカ式＋灰溶融炉）」、「ガス化溶融方式（シャフト式）」及び「ガス化溶融方式（流動床式）」で検討した結果、「温暖化負荷（CO2 排出量）」、「信頼性・安定稼働」、「施設の運転管理（補修の頻度）」、「環境保全・資源循環性」及び「安全性・安定性」において、優位であると評価し決定したとのことでした。

2 ごみの減量や資源化に向けて

焼却灰・飛灰の年間発生量約 5,000t のうち焼却灰 3,000t をセメント原料化として参考になりました。

3 ごみ発電について

ごみ発電（蒸気タービン発電機 3,800kW）を行い、電気は施設内で利用のほか、周辺公共施設（公園、資源集積所、福祉施設、上下水道施設）へ送電し、余った電力は売電しているとのことでした。

4 市民に開放された施設

ごみ処理施設は、いわゆる迷惑施設と言われがちですが、施設内に体育館的な大研修室をはじめとする市民開放施設が様々な用途で作られており、市民が身近に感じられる立ち寄れる施設となっていました。

特に、有事の際は「避難所」として活用できるようになっていて、大研修室だけでなく、和室の研修室が配置されていたり、廊下の幅が広く作られたりしていたのは参考になりました。

5 その他

最後に、興味深かったのは、今治市が当初第 1 候補としていた地域では、2 年間で費やしたものの地元と交渉の場すらつくることができなかったとのことでした。

そのため旧クリーンセンターがある地域にお願いし、隣接する場所での建設に同意をいただき、地元へは建設前に 10 回、建設中に 4 回と適宜説明会を行う等、旧クリーンセンターより安全面、環境面で良くなることを真摯に説明し理解をいただいたとのことでした。

本市においては、地元の方々に十分な説明を行う等、しっかりと事業を進めていただきたいと思います。

【議員氏名】 成田康弘

18 年前に今治市と越智郡 11 市町村が合併し、4 施設あった一般廃棄物ゴミ処理施設を 1 つにする「新ごみ処理施設建設整備検討審議会」が 13 年前に設置されました。「21 世紀のごみ処理施設のモデル（今治モデル）について」答申し、6 年かけて着工に至り、平成 30 年 4 月稼働した施設が、バリクリーンです。

建設費 128 億円 国庫補助金 38 億円 合併特例債 85 億円 一般財源は約 5 億です。

事業方式は、DBO 方式で、運營業務を委託契約（100 億円）で運営されています。

敷地面積は、約 3.7ha で、174t/24h の規模で、ストーカ炉式の焼却方式です。

ストーカ炉を採用した理由は、①温暖化負荷（CO2 排出量） ②信頼性・安定稼働 ③施設の運転管理（補修の頻度） ④環境保全・資源循環性 ⑤安全性・安定性による

ごみの焼却熱エネルギーを利用して発電（蒸気タービン発電機 3800kW）させ、施設内全ての電力はもちろんのこと、隣接する公共施設等に供給。さらに、余剰電力は 2/3 売却しています。

建設経緯については、候補地を 6 か所選定し、第 1 候補地では、2 年間で費やしたが、地元と交渉の場すら作ることが出来ず、旧センターの隣接する場所で合意を得ています。

地元へは、建設前に 10 回、建設中に 4 回の説明会を実施し、真摯に説明し理解を得た。

その他の施設概要は、「防災拠点」として使用。万全の耐震・面神対策を施し、災害時には、冷暖房完備、非常食や飲料水が備蓄され 300 名を超える市民が安心して避難できる場所として活用できる態勢が整っています。

平時においては、見学者ホール、大研修室（体育館並み）、多目的室、会議室、和室など大小 10 個ほどの部屋が、常時、市民に開放され利用されています。

「フェーズフリー」は、平常時と災害時という時間的なフェーズを取り払い、「もしも」の時だけではなく、「いつも」の時にも役立ち、価値のあるものにするといった新しい概念です。

今後、広域で検討されている「新ごみ焼却施設」が、暮らしを支え地域がにぎわう集いの場、人と地域を育む場であってほしいと強く感じる事が出来た視察となりました。

	【議員氏名】 黒川昭治 今治クリーンセンター 通称「バリクリーン」 ・ ごみ処理施設 今治市クリーンセンター「バリクリーン」は、平成 30 年（7 年前）から稼働している今治市で唯一のごみ処理施設であり、以下の 3 つの柱からなる「今治モデル」をコンセプトとしている。 ①廃棄物を安全かつ安定的に処理する施設 ②地域を守り市民に親しまれる施設 ③環境啓発、体験型学習及び情報発信ができる施設 ごみの資源回収やごみ焼却熱を利用した高効率発電など、循環型社会の形成を推進するほか、災害時における避難所機能や、体験型学習ができる環境啓発機能を兼ね備えた施設である。 ○防災拠点としての機能： ・ 災害時に 320 人が避難可能 ・ 非常用発電機、飲料水・非常食の備蓄 ・ 地下水高度処理設備、排水貯蓄機能 ○環境啓発活動： ・ 見学者ホールの開放 ・ 工場内部の見学コース ・ 年間約 2 万人が訪問 ○フェーズフリーの考え方： ・ 平常時も非常時も役立つ施設として評価 （フェーズフリーアワード 2022 Gold 受賞） ゴミ処理施設は近隣住民にとって「迷惑施設」という考えをもつ人は多く、バリクリーンも同じ場所での建て替えは地域住民との話し合いを何度も行ったが実現しなかった。 施設を見学してみて驚いたのは、すぐ隣に公園があり、その隣には住宅が並んでいる。 また、管理棟の中にいくつもある「会議室」は、当市の公民館のように住民のコミュニティーの場となっており、「大会議室」は体育館のように使用されている。視察当日も卓球が行われていた。 施設近隣地区は利用に優先枠が設けられているとのこと。 また、処理棟・管理棟とも余裕のある広大なスペースは、コンセプトの一つの「域を守り市民に親しまれる施設」を感じ取れる施設であった。
--	---

7 写 真 等

※視察の場合は必須、研
修の場合は任意



※視察先、研修先ごとに1枚作成すること。

※「6 所感、提言事項、課題等」は、参加者全員分を記載すること。